

青丘文庫研究会月報

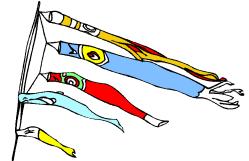
No.243 2010年5月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 在日朝鮮人運動史研究会関西部会(代表・飛田雄一)
 朝鮮近現代史研究会(代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として2000円/年をお願いします。

エッセイ

100年を越えて顔の見える関係を考える

伊地知 紀子



ゴム工場クネギ、弁当箱包んで、イルホロカンダ~

1992年、私が初めて大阪市生野区で在日済州島出身者の生活史を聞き始めたときに教えていただいた歌である。語り手は、1920年生まれの金順準さん。「クネギ」とは娘さんを意味するとのことだった。どうも「」のようである。14歳のときに朝天面咸徳里から大阪に来た金順準さんは、朝天里の人が経営するファスナー工場に入りチャックを作るためにファスナーの爪を指で折る(「植える」と表現された)仕事をされ、その後に靴を製造するゴム工場に入った。上記の歌は、その当時歌っておられたものだ。金順準さんは、ご自分の生活史を子供や孫にも残したいとおっしゃったので、語りを編集し、1994年『異郷暮らし』というタイトルをつけ簡易製本して差し上げた。また、ご本人の許可を得て、できるだけ多くの方に読んでいただければと思い、生野図書館を始め関連する所へ発送した。このとき12名の済州島出身者の生活史を伺ったことがきっかけとなり、1994年以後2年間、私は済州島で生活することにした。その後毎年済州島に行くようになったが、2009年、12年ぶりにやや長めに済州島で生活する機会を得られた。

2009年9月半ばから12月末までの3ヶ月半。一人で行くのなら長年のフィールドである杏源里に住むのだが、今回は夫と娘を伴う初めての家族滞在となつたため済州市で家を探した。幸運なことに、現在京都へ留学している大学院生の実家の2階を借りることができた。次は、1年生である娘の小学校探しである。家のそばに済州西初等学校がある。3月に学校側にお願いはしていたが、外国国籍の子供は初めてということで、9月に新任の校長先生と面談してくださいといわれていた。いざ面談に行くと、校長先生は「私の妻の両親は大阪にいるんですよ」とおっしゃり、教頭先生は「私の兄も大阪にいますよ」と、娘についてはさして話題にならず、もっぱら大阪の話で盛り上がりそのまま担任の先生が決まったのだった。1年生の主任が杏源里出身で、15年前に私が初めて村に住んだときにいろいろ世話をしてくれた人だった。担任の先生はなかなか工夫をされる方で、毎日終業時には「アンニヨンヒケセヨ~。じゃあね~、またね~」と娘一人のために全員合唱をさせていた。毎日というのが申し訳なくもありながら、連日娘を引き連れて遊んでくれる同級生たちの姿に、安心して私も島をウロウロできると喜んだ。



普段は、短い滞在期間に目的を済ませようとするので余裕がない。しかし、今回は12年ぶりに済州島の生活のペースのなかで多くの人に出会い、いろいろな出来事に出くわすことができた。寂しいことに、今回は弔事が多かった。小喪（1周忌）が1件、葬式が3件。どなたも長くお付き合いいただいた方ばかりであった。もっと伺えるお話があつただろう。そんな思いは、個人でもチームでも続けている済州島出身者の生活史調査のなかで、最近ますます強くなってきた。

滞在中も、島のあちこちでいろんな方から生活史を聞いた。最高齢は、92歳の女性である。冒頭で紹介した金順準さんと歳が近い。南西部の村で元気な一人暮らし。村の家にこだわっておられる。その家は、解放前に夫婦で渡阪し働いた時に貯めた金で立てたものだ。16歳で和歌山の紡績工場に行き、1年後大阪市東成区中浜で学生服などを仕立てる店に入った後に、済州島の兄嫁から手紙が来た。ムルジル（済州島の言葉で「潜る仕事」）のために数名のチャムス（済州島の言葉で「海女」）とともに大阪築港へ着くという内容だったという。見事に大阪築港で再会した二人は一緒に東京に出て、八丈島へ渡り天草採りに従事した。姉は季節労働者として、日本に潜りに来ていたのである。

こうした季節労働としてのチャムスの移動は、陸地へは1892年蔚山へ、日本へは1903年三宅島へ出漁したことから始まる。出漁先は次第に広がっていき、静岡・千葉・鹿児島・高知・徳島・三重などで操業していた。解放前に三重までどのように行ったのかは、塚崎昌之さんや亡き金慶海さんが新聞記事を提供してくださり、少しずつ分かり始めた。最近は自分で時間のあるときにホソボソと新聞記事を探している。

記事が教えてくれるポイントを結ぶ作業も必要となる。私が住んでいる愛媛に関する書籍『愛媛県史<地誌2>南予』には、1946年に佐田岬で撮影された済州島チャムス3名と地元少年1名の写真が掲載されている。なぜこの写真ができたのか？疑問を持って佐田岬に一昨年出かけた。すると、郷土史家の方から、1930年頃に済州島から来た男性が海の権利を買い、済州島から毎年チャムスを連れてきて天草採集をしていたと教えていただいた。しかし、先の写真の撮影時期は解放後である。あのチャムスはいつどこから来たのだろう。まだ明確な答えは見つからないが、気になることがある。1947年済州島から日本へ密航する人々の到着地の1つが愛媛県八幡浜であった。八幡浜は佐田岬の付け根にあたる。なぜ八幡浜に到着したのかという問いに、密航者の答えのうち1つはこうだった。「解放前から海女たちがよく来ていてルートがわかっていたから」（出典：村上尚子「四・三時期の『在日済州人』 済州島の渡日と在日朝鮮人社会（1945-1950）」（『在日』 済州発展研究院、2005年）。

密航については、チームで続けている解放直後の在日済州島出身者への生活史調査のなかで少しずつデータが集まってきた。こうした、韓国併合から100年なかで語られなかつた歴史をできるだけ丁寧に埋めていく作業の必要性を実感する。とともに、チャムスの移動から広がる世界を見ていくと、帝国日本の拡張のなかで100年を越えて形成されてきた朝鮮半島から日本への移動の流れをさまざまな側面から見ていく必要性も感じる。先の女性のように、チャムスはチャムスとしてのみ働いていたのではない。就業調査には出てこないような多様な仕事を数々してきておられる。生活史を語っていただきたびに、目の前に座っておられる一人ひとりの人生のなかに、韓国併合100年を含めた日朝関係史が様々な姿で刻まれていることに向き合う。

近年、世間ではエコブームで顔の見える生産が推奨され、自分たちの生活への振り返りが求められている。日本と朝鮮半島の100年を超える歴史もまた、私たちの生活に繋がっている。

顔の見える関係への想像力は、日本と朝鮮の歴史においてもより広く推奨されてもよいのではないだろうか。

故金慶海さんの寄贈資料のうち新聞記事が開架されました。

その他の資料は引き続き整理中です。





青斤文庫研究会のご案内

第319回・在日朝鮮人運動史研究会関西部会

5月9日(日)午後3時～5時

「戦前期大阪における朝鮮人『不法占拠』」

クリアランスと共同住宅

塚崎昌之

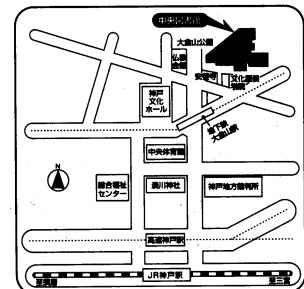
第274回・朝鮮近現代史研究会

5月9日(日)午後1時~3時

中央アジアのコリアンを訪ねて

会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-

第十一章 评估与决策



【今後の研究会の予定】

6月13日(日)在日(杉本弘幸) 近現代史(安岡健一) 7月11日(火)在日(宇野田尚哉) 8月はお休み。9月12日(日)在日(水野直樹) 近現代史、未定。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1~5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

6月号以降は、宇野田尚哉、太田修、小野容照、梶居佳広、高正子、斎藤正樹、坂本悠一、砂上昌一、高野昭雄、全淑美、塚崎昌之。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

- ・ 4月30日より9日間、神戸学生青年センターの「中央アジアのコリアンを訪ねる旅」に11名ででかけます。昨年、青丘文庫で講演してくださったゲルマン・キムさんの案内で、カザフスタン、ウズベキスタンを訪ねます。翌、5月9日にさっそく青丘文庫で生々しい?レポートをいたします。
 - ・ 一昨年建立された<神戸港 平和の碑>の集いが4月25日にありました。毎年4月第4曜日に開きます。<神戸電鉄朝鮮人労働者の像>関係は、10月第3日曜日、今年は10月17日です。集会と焼肉の会がセットです。飛田雄一 hida@ksyc.jp